

令和7年度 学校評価 品川区立第三日野小学校

品川区立第三日野小学校

校長

松本 寛

第三日野小学校校区教育協働委員会

委員長

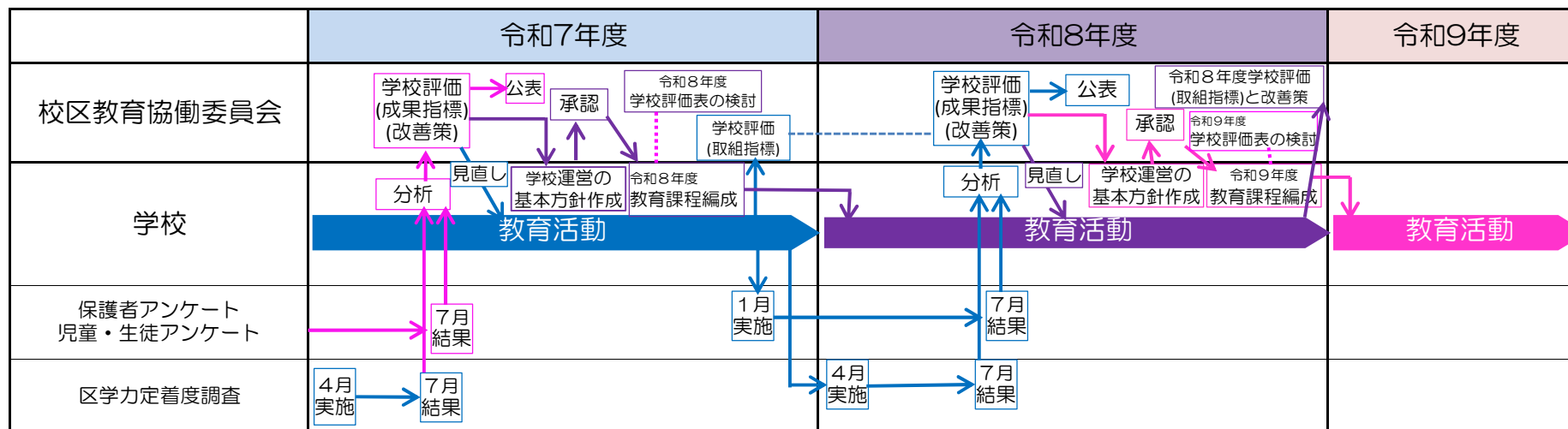
佐藤 隆之

校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱（改正 令和5年3月24日 教育長決定 要綱第5号）に基づき、次に掲げる事項について、学校評価を行っています。

- (1) 学力に関すること。
- (2) 人間性や社会性に関すること。
- (3) 体力・健康に関すること。
- (4) いじめ防止の取組に関すること。
- (5) 特色ある教育活動に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度の教育課程の編成に生かしていきます。

学校評価の流れ（※令和7年度の学校評価が令和8年度および令和9年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



令和7年度 学校評価 品川区立第三日野小学校

評価項目1 学力に関すること

重点目標		【基本的な考え】 ◇児童が生涯にわたって学び続けようとする態度とそれを支える知識、技能を習得させる。 ◇身に付けさせたい力：主体的に学習に取り組む力。読み、書き、計算など、学習の基礎基本となる力、及び思考力・判断力・表現力。 【重点的な実践内容】 ・タブレット端末を有効に活用する。 ・個別指導時間のマイタイム、品川地域未来塾、寺子屋などで補充学習を充実させる。 ・算数科の少人数習熟度別学習(3～6年)、非常勤講師によるサンライト教室(1・2年生)、指導助手によるきめ細やかな指導(1～6年生)を行う。		
評価指標	最上段：成果指標	最上段：成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降：取組指標			
①	【問題解決力】70%の児童が、自ら問いを見付け、課題解決したり、自分の思いや考えを豊かに表現したりすることができるようにする。	12月1月の探究学習発表会では、全児童が課題やテーマに沿ったチームを作り、友達と協力して調査し資料を作成してプレゼンテーション形式で発表することができた。	A	成果が上がってきている要因として、探究的な学習の意義の理解や進め方が教員や児童に浸透してきている。次年度はこれまで、本校での探究をさらに深めるために、各学年の探究テーマを固定する。 各教科で、自分の考えを表現したり、友達の意見から考えを作り変えたりする活動を継続させる。 来年度も教科書の知識だけでなく、それをもとに課題を考え自分なりに調べていく学習を行い、探究学習の基礎づくりを行う。
	【表現力】 学んだことを他者にプレゼンテーションする学習活動を年3回以上行い、児童が自分の思いや考えを伝えることができるようにする。	学校公開だけでなく普段の授業から自分の思いや考えを説明したり、前で発表する学習が増えてきた。プレゼンテーション形式に絞らず、ディベートで伝え合う活動を行ったり、日常の教科学習の中で人前で考えを述べるようになった。	B	
	【学習活動の工夫】生活科・市民科一貫プランを中心に、児童が自ら問いを見つけ、協働的な学びを通して、探究的に課題解決する学習活動を展開する。	普段の授業や行事を通して、課題を友達同士で協働的に調べたり、まとめたりする学習をすすめており、探究学習の基礎につなげている。	A	
②	【学力調査結果】 品川区学力定着度調査で、各教科全国平均より10ポイント上回るようにする。	令和8年度の学力調査は、全ての学年で全国平均を上回る結果となったが、目標に到達できなかった。傾向として全国と比較して全校平均が9ポイント以上上回っている。また5年生以上には平均より10ポイント以上の正答率が目立つが、低学年は開きが小さくなっている。昨年度の課題であった理科は、6年生で8.7ポイント上回ることができ、目標に近づけた。	B	本校の課題として、学力の二極化が挙げられる。算数に関しては、全学年で習熟度別学習をすすめる環境を整えているが、少人数指導の環境を継続できないことが続き、定着や成果を図ることができなかった。 来年度から高学年は教科担任制、中学年では1部の教科による教科担任制をすすめ、教科専門の教員配置により児童の基礎基本的な学力の定着を目指していく。
	【個に応じた学習活動】 算数科で習熟度別学習や指導助手の有効活用を実施し、個々の学力に応じた学習を展開する。	3～6学年では、支援が必要な児童を抽出し、個に応じた指導を行うことができた。習熟度別の学習を4～7月までに220時間行うことができた。後期から算数担当が不在となったが、学年内で習熟度別学習をすすめた。	B	
	【学習支援】年間20回程度の品川地域未来塾や寺子屋の計画的実施、基礎基本的な計算ドリルの活用により、個別支援が必要な児童の計算力の定着を図る。	品川未来塾では、計画的に行い、指導員が一人一人に付き添って四則計算の定着を図っている。また、寺子屋、サマースクールでは、教員が抽出した児童に対して授業の補習を行い、基礎基本の定着をすすめている。	B	
③	【読書量の増進】 読書を推奨する。1～4年生は月5冊、5、6年生は月2冊以上の読書量を確保する。	4月から12月までの貸出冊数は1～4年生で6.5冊、5、6年生で3.3冊という状況である。目標を上回ることができた背景に下記の【貸し出し回数の改善】や読書週間の効果が見込まれた。	A	本の貸出状況から、通年を本を借りて読む習慣が身に付いてきた。特に今年度は読書週間のある月の貸し出し冊数が増えたことから、委員会や学級での推進が成果となった。 来年度も継続して読書習慣が身に付くようにし、豊かな日本語指導の充実を図る。
	【貸出方法の改善】 図書の通常の貸出数を1回3冊とし、読書週間期間中は貸出数を増やし、読書活動を行う。	12月までの一人あたりの1か月の平均貸出冊数は約5.3冊であり、昨年度の月平均を1.2冊以上の向上が見えた。読書週間の図書委員の取組や教員による本の紹介、図書の時間や朝の読み聞かせなど読書に親しむ環境づくりができたことが成果につながった。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

令和7年度 学校評価 品川区立第三日野小学校

評価項目2 人間性や社会性に関すること

重点目標		【基本的な考え】 ◇教師と児童が信頼関係を深めたり、児童同士が学習活動を通して関係を深められるような教育活動を展開し、児童が前向きに学校生活を送ることができるようにする。 【重点的な実践内容】 ・教員や児童がすすんであいさつを交わす習慣を身につける。 ・市民科地区公開講座を開き、人間関係に関すること、社会に関することなどを中心に一人一人が自己対峙できる授業を行う。 ・市民科や日常の学校生活を通して、相手を思いやる気持ちや自己肯定感を高められるようにする。		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	【学校風土調査の結果】 「この学校のきまりは納得のいくものだ」の項目で、偏差が50を超えられるようにする。	第1回学校風土調査では、53.5ポイントであった。第2回の調査では53.1ポイントであった。通年を通して区内平均を上回る結果である。各学級担任が4月にオリエンテーションを通じて丁寧に説明を行い、日々の生活指導でも適切に指導している表れと感じている。	A	学校風土調査の結果は2回とも50ポイントを上回ることができた。生活のきまりが児童に意義付けられるように引き続き伝えていくとともに、きまりの見直しを児童が主体的に関わる方向性を検討する。
	【児童理解】 新学期や長期休業明けに教師は、子どもたちに学校のきまりを分かりやすく説明したり、悩みなどの相談にのったりするようにする。	4月に各学年ごとに集会を行い学校生活の進め方を説明したり、長期休業前には、生活指導主任から「休み中の過ごし方」について話を行っている。	B	
②	【あいさつの定着度】 学校公開アンケートで「あいさつ」についての質問で肯定的な評価が85%を上回るようにする。	6月の学校公開のアンケートでは肯定的な評価が77.9%という結果となった。10月18日の学校公開では85%に達成できるように教員・子どもたちで「あいさつ」を活性化するように取り組む。	A	6月の学校公開の保護者アンケートではあいさつへの肯定的な意見が77.9%であった。後期に向け、教員自身が意識して児童にあいさつしていく中で、児童からのあいさつも増えてきた。あいさつ名人の取組も児童の意欲につながる取組であり、来年度も取り組んでいく。さらにあいさつができる第三日野小学校をめざし、全校体制ですすめる。
	【児童主体のあいさつ活動】 生活委員会や学級活動において、意欲的に「あいさつ」が広がる取組を年に2回以上行う。	7月の夏休み前に生活委員会が中心となって「あいさつ週間」をおこなった。また、本校の伝統的な取組でもある「あいさつ名人」の数が増えるように、引き続き学校・学級で行う。	B	
	【言語環境の整備】 教師自らが日頃から手本となる挨拶・言葉遣いを行い、学校の言語環境を整える。	教師自身が学年にあった適切で丁寧な伝え方を意識して教育活動を行えるように教員スタンダードの共通理解や研修を行いすすめている。	A	
③	【地区公開講座】 市民科授業地区公開講座のアンケートでは、市民科の授業実践に対する肯定的評価が80%を上回るようにする。	保護者アンケートの中では、市民科の授業内容に関する回答は得られなかったが、市民科の授業を真剣に受けている様子を肯定的に捉えている意見があった。	B	市民科公開授業への参加は多い反面、講座への出席が少ない。来年度は、事前に周知を行うだけでなく、PTAとも情報共有しながら受講を促していく。 遠足・宿泊行事を通して、友達との関係性を築くことができた、理解したりする姿を活動の振り返りで見取ることができた。また、委員会・クラブ活動を通して下級生に分かりやすく活動内容を伝える力が付いている。
	【人間関係形成領域】 行事や授業を通して、自分や友達のよさを見付け、互いを認め合う大切さが実感できる学習活動を行う。	4月から7月にかけて遠足や宿泊行事を通して他者理解をすすめたり、市民科の授業を通して思い遣りの学習をすすめている。	A	
	【自治的活動領域】 社会的な判断や行動が取れる学習活動を行う。	委員会活動やクラブ活動を通して、下級生の手本を示したり、企画運営を行いながら活動が充実したものとなるように取り組んでいる。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

令和7年度 学校評価 品川区立第三日野小学校

評価項目3 体力・健康に関すること

重点目標		【基本的な考え】 ◇児童が生涯にわたって、運動に親しむ資質や能力の基礎を育て、体力の向上や健康の保持増進を図る。 【重点的な実践内容】 ・テクニカルアドバイザーを活用し、興味・関心を高め楽しさを味わわせる授業を展開し、体力・運動技能の向上を図る。 ・ワンミッツエクササイズやスポーツトライアルを実施し、日常的に運動に取り組ませる。 ・食育の学習を通して食や健康に関する知識や関心を高めさせる。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	【主体的な運動習慣】 80%の児童が、すすんで運動に取り組むことができるようにする。	「児童の80%以上が主体的に運動に取り組めた」と全学年のうち92%の学級で達成することができた。	A	体育科の研究を2年間行った成果として、指示を聞く時間、作戦を立てる時間や運動する時間などのメリハリのある流れを教員・児童が身に付けられた。また、TAの積極的な活用により授業準備時間が大幅に減り、その分運動時間に当てることにつながった。課題として、時間割上、TAの時間帯に当てはまらない学級がでるため、ローテーションを行うなどの工夫が必要である。
	【運動量の確保】 体育授業1単位時間の60%は、運動学習になるような授業づくり、授業展開を行う。	本項目について92%の学級で達成でき、運動中心の授業展開を行い、運動量の確保ができた。	A	
	【TAの活用】 テクニカルアドバイザーを活用し、教具の準備を早め運動量を増やすとともに個に応じた指導を展開する。	88%の学級がテクニカルアドバイザーと連携して体育科の学習をすすめることができた。教材の整理や場の準備の補助となり学習時間の確保となっている。	A	
②	【外遊びの奨励】 80%の児童が週3回以上外遊びを行い、日常的に体を動かし、運動技能の向上を図る。	外遊びの項目は90%の学級で達成することができた。「なわとび週間」や「マラソン週間」の取組も本項目の成果につながっている。	A	体育的活動の充実ぶりが本校の長所である。通年で、短縄・長縄・マラソンと外に出て体力を高める機会をつくっている。また、学校全体で取り組もうという意識の高さから児童の取組に対する意欲が高い。今後も教員・児童相互で運動に取り組める環境を整えていく。
	【運動の日常化】 品川スポーツトライアルに取り組み、カードなどを活用しながら日常生活で運動に親しむ機会をもたせ、体力・運動能力向上に努める。	品川スポーツトライアルを全校で実施し、児童は意欲的に参加することができた。短縄では、区内でも1位や上位の成績を取る児童が増え、取組に対する意欲につながっている。	A	
	【全校的取組】 体育朝会、チャレンジジャンプやマラソン週間の取組を通して、体力向上を図る。	全校の92%の学級で本項目の体育的活動に積極的な参加ができた。運動する習慣化がチャレンジジャンプやマラソン週間の取組の意欲につながっている。	A	
③	【食事の調整】 給食指導の中で、児童自身が自分自身にあった食事の量を知り、給食の残飯率を10%以下にする。	4月～12月までの残飯率はおおよそ5%となった。昨年度は6%であり、食事量に対しての自己管理がすすんでいる。	A	残飯率が昨年度は6%に対し、今年度が5%となり、自分にあった食事量を自己管理できる児童が増えてきた。また、委員会で給食のメニューや食材について知らせたり、学習と関連した献立を作ったりしたので児童の食への関心が高まった成果として来年度に引き継ぐ。
	【食育の推進】 全学年で食に関する体験活動を行ったり、啓発教材を活用したりして、食に対し関心を高める指導を、各学年で行う。	低学年では、給食指導開始に合わせて、「エンドウ豆のさやむき」「トウモロコシの皮むき」の体験を通して、「食」について学習した。高学年では放送委員が毎日献立紹介するなど、「食」に関する指導を行った。給食のメニューも「3年探究学習」と関連づけたり、「米の食べ比べ」を行ったりと食に対する関心を高める取組ができた。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

令和7年度 学校評価 品川区立第三日野小学校

評価項目4 いじめの防止の取組に関すること

重点目標		【基本的な考え】 ◇複数の教員の目で児童の変化をいち早く察していじめを早期に発見する。いじめが生じた際は早期に対応する。 ◇地域や家庭と連携し、いじめ根絶の取組をしていく。 【具体的な内容】 ・いじめは絶対に許されないと強い意識をもち、日々の教育活動全体をとおしていじめの発見や指導・助言、啓発を随時行う。 ・各種いじめ調査などで相談や個別にみていく必要のある児童に対しては、継続的に状況を確認していく。 ・学校におけるいじめへの対応やいじめ問題の重要性を地域や保護者に伝え、家庭や地域と連携協力を図る。		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	【学校風土調査】 「この学校の先生は、いじめなどをしっかりと注意してくれる」の項目で偏差50ポイントを上回る。	昨年度は50.9ポイント(通年平均)であった。今年度は、53.0ポイントと2.1ポイント上回ることができた。	A	本校では、「ふれあい月間」(いじめ防止月間)を活用し、「トリプルチェンジ」の授業を年間3回行っている。教員からいじめの具体例や定義の授業をおこない、実際の場面での指導を重ねることができた。来年度も同様にすすめていく。
	【市民科等】 市民科学習を中心に、年間3回「いじめ防止プログラム」の授業を実施し、いじめに対する正しい理解をもたせ、正しい人権意識を育てよう指導する。	全学年学級で年3回のいじめ防止プログラムを実施し、いじめの定義だけでなく、いじめが起きたときの初期対応について学ぶことができています。教員自身も「いじめは絶対に許さない」という姿勢で指導に当たっている。	A	
②	【各種リソースの活用】 いじめDアンケートを年間7回やNicoliを年間3回実施し、関係を客観的要素でも把握できるようにする。	いじめDアンケート7回、Nicoli3回の実施ができた。調査ツールを活用し、教員が実態把握を早期に行うことができています。	A	「いじめDアンケート」を実施しただけでなく、週3回以上「デイケン」による児童観察を行った。その成果として、担任が早期に児童の悩みや相談への対応ができる体制づくりができた。また、毎月1回を定例として「いじめ対策委員会」を開き、いじめの状況確認や対応について組織的に取り組んでいる。また、SCや各関係機関と情報共有したり対応を連携したりしながら児童が安心して学校生活を送ることができるようにしている。今後も保護者と共通理解を図りながら学校・家庭で協力しながら問題解決できるようにすすめていく。
	【教員によるいじめの早期発見と対応】 児童の普段の学校生活を多くの教員で観察し、法律によるいじめの定義に則り、早期発見、対応を組織的に行う。	「デイケン」と呼ばれる相談ツールを週3回以上活用し、日々の心身の調子を担任が把握している。相談がある場合、すぐに対応できる環境を整備している。いじめ対策については年度はじめに職員研修を行い、職員に定着させている。	A	
	【組織的な対応】 週1回生活指導夕会や月1回の「いじめ対策委員会」で情報共有を行う。問題行動は対策委員会を中心に、組織的な対応を行う。	毎月、「いじめ対策委員会」を開き、各学年主任からいじめの定義に当てはまる件を委員会で報告し、認知を行い対応策を共通理解できた。いじめ内容について学校全体で捉え、対応していく組織づくりを継続する。	A	
	【関係諸機関との連携】 スクールカウンセラー、ハーツ等と連携協力して、早期解決できる体制を強化する。	報告・連絡・相談を密に行い、いじめに繋がる小さなできごととも学年、学校で共有している。必要に応じて学校と連携しながら保護者との対応を行うこともできた。	A	
	【家庭との連携】 連絡手段や相談体制の周知など、児童・保護者と迅速に情報共有・相談ができるようにするとともに個人面談を夏休み前に行い、1年間を通して連携を図る。	個人面談だけでなく、日ごろから保護者と情報共有を行う。また、問題行動の改善に向けた指導は保護者と共通理解しながらすすめていく。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目5 (特色ある教育活動に関すること)

重点目標		【基本的な考え】 ◇品川CSの特徴を生かし、学校と地域、保護者が協働して学校のエデュケーショナルな活動の活性化を図る。 ◇行事や児童同士が関わる活動を通して、リーダーシップを育成したり、個の伸長を図ったりする。 【具体的な内容】 ・自ら課題を見付け、探究的な学びができる場を設定する。異年齢児童同士の交流を通して、自分の考えを広げたり深めたりする。 ・感性を育てる、音楽科・図画工作科指導を充実させる。 ・校内研究を通して、教師の授業力の向上を図り、日常の授業実践につなげる。		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	【品川CSの推進】 学校地域Co中心に、校教協や学校地域支援本部を円滑に機能させ、ゲストティーチャーを活用した教育活動を年間3回以上行い、充実を図る。	学校地域コーディネーターを中心に、地域未来塾を開催し、教員と連携を図りながら、ゲストティーチャーを活用した授業を4回実施することができた。	A	学校地域コーディネーターの活用により、学校の中で多様な取組ができるようになった。地域人材を活用して、英語や日本語の読み聞かせや茶道の指導やミシンボランティアの手配など様々な分野で地域との架け橋となった。来年度のコミュニティ・スクールデイも3年生児童と校区教育協働委員が意見交流できる場を設定し、より地域と学校の繋がりを活性化させていきたい。
	【学校支援地域本部の活用】 学校支援ボランティア等による教育活動の支援や教育環境の整備を組織的に行う。	学校地域コーディネーターを中心に、読み聞かせボランティアや家庭科のミシン学習の補助など、地域人材を活用した学習活動を行い、充実した教育活動につなげていた。	A	
	【校区教育協働委員会の運営参画】 年6回の校区教育協働委員会を通して学校運営に参画し、有効な支援活動を企画するとともに、「C・S DAY」を活用し、児童との意見交換の場を設定する。	学校行事の参観やコミュニティ・スクール デイを活用し、3年生の児童と交流を図り教育活動への理解や共感を得ることができた。今後も支援活動ができる組織をつくっていく。	A	
②	【体育科を通じた主体的で協働的な学習の推進】 年間3回の研究授業を通して、児童が主体的に他者と関わり合いながら思考、判断、表現力を培う授業づくりを行う。	講師から、「体育科の教科特性」や「授業づくりのポイント」を示してもらい、校内研究の実施を行った。児童が友達と関わり合いながら運動に取り組む、自分の考えを伝え合う姿が3回の研究授業で見られた。	B	2年間を通して体育科の授業研究を行い、体育の学習の作り方を学ぶことができた。体育科の授業では運動量が増えただけでなく、友達と意見を交わしながら学習をつくる形ができてきたことが成果である。探究学習発表会では、全学年でテーマに沿って工夫のある発表ができた。展示方法の工夫により個と学年・学校が一体となった展示となり、達成感をもたせることができた。課題として、行事の効率化が残った。
	【探究学習発表会】 各学年が探究学習発表会を実施し、児童一人一人が探究活動や発表を通じて自己の成長を実感できるようにする。	12月と1月に探究学習発表会をおこなった。生活科や市民科一貫プランを中心に、主体的で探究的に学びを深め、発表することができた。	A	
	【展覧会】 主体的に表現する学習活動を展開し、創造性と協調性を育む。(行事の効率化を検討する)	年度当初より各学年で展覧会に向けて作品作りを行った。立体や平面の作品だけでなく、学年児童全員で共同制作を行い、1つの作品に仕上げる試みを行うことができた。	A	
	【たてわり班活動】 「三日野ふれあいタイム」を月1回程度行い、縦割り班活動を通して、上学年は高学年の自覚を、下学年は上学年に親しみや尊敬の気持ちがもてるようにする。	クラブや委員会、縦割り班を通して他者を認め合うことができた。思いやりをもって活動する姿が多く見られた。回数を増やしたり、活動を工夫したりして、交流が深まるようにしていく。	A	
	【異年齢交流】 「1年生のお世話」「クラブ」「委員会活動」を通して、異年齢交流を通して、集団や社会における生活及び人間関係をよりよくしようとする力を養う。	三日野ふれあいタイムでは、6年生を中心に遊びを通じた異学年交流ができた。低学年に向けて声のかけ方を考えたり、関わり方を工夫したりしながらすすめることができた。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成